第7号
（月）
2013年11月1日

七里ヶ丘こども若者支援研究所

それが社会参加だ

京都嵯峨野三千院

鎌倉市七里ガ浜東2－31－12
09072124055
qq5656r9@happytown.ocn.ne.jp
発行責任者　滝田衛

新たなことを始める　私たちは明日に向かういきもの・・・

9月末から10月へ若者が動き出した。Move　Change　となる？！　Aさんは20歳を過ぎ高校生をやりなおそうと関西へ転居入学した。1年余りのカウンセリング？　いや討論？　いやいや闘論。ひきこもり経験から発する鋭い論調、僕を真剣に向き合わす力だった。心地よい疲労、楽しく充実した時を過ごした。30代女子Bさん、親元を離れた6年間余　SOS，泣いて語って笑った日々。人間関係に迷い悩む女子、実に誠実。フリースペース経験から3年間3度仕事をした。そしてある出来事から親を受け入れ（親も）地元へ帰ることになった。30歳大学生川辺悟史さん（通信4号参照　右写真）に招待を受け学園祭へ出かけた、写真部展示と模擬店。写真は彼の年下の仲間が撮影。“絶望”は社会や大人が突きつける悪しき癖だ。こどもは新しい明日に向かう。

寄稿「学歴について」　新舛秀浩さん　３２才　某通信大学生

先日週刊誌に都立高校が躍進している記事が僕の目に入った。内容は週刊誌おなじみのここ数年日比谷高校などの都立高校が東大合格者を増加している類の記事であった。僕自身は中学から不登校で高校は通信生。大学受験にチャレンジするも当然志望校には入学できなかった。仕方なく通った大学には二ヶ月くらいで精神疾患に陥り中退。そんな僕がなぜ学歴にこだわるのか。それは父親の影響であろう。父親の世代では有名大学から大企業に入るのが人生の絶対的幸せの価値であり、その影響をもろに受けた僕の父親から聞かされるのはいつもあの人は〇〇大学で優秀なんだ。あの人は〇〇大学だから相変わらず仕事ができない、このような感じで話すものだから影響を受けないわけにはいかなかった。　また、僕は近しい人々が有名大であったこともあり僕自身の学歴と周囲との学歴の差に悩まされ続けた。一時は試験のない慶応の通信に入学しそれだけで学歴というものを欲したこともあった。32歳になった今でも、同世代の有名人が海外の大学へ留学することを聞くと羨ましく思う。仕事をすれば学歴など関係ない。学歴はその人の一部でしかない。もはや学歴だけでその後の人生がうまくいく保障もない。これらの言葉を聞くがやはり僕には空虚に聞こえる。だって僕が仮に東大卒だったら良くも悪くも違う人生になっていただろうし、周囲からの目線も当然違うと思う。高学歴ゆえの苦しみがあることもわかってるし、この年齢になっていまさらと思う。しかし多くの人々がどうしても気になるこの学歴。たいした学歴のない僕のこの「ザ学歴」は永遠に心のなかから消えない価値観だろう。

学歴、差別、貧困　はたして教育の意味は？　平等と人権へ

10月8日（土）横須賀市総合福祉会館で不登校相談会・進路情報説明会が行われた。会を代表してアンガージュマン・よこすか島田徳隆理事長（左写真）が、穏やかに不登校の子どもや親の気持ちを理解する挨拶をした。この会の目的は県市教委や高校等そしてNPOが、教育の機会に差別がないことを表明する会でもある。「不登校していたら高校へ行けない」というウソをふっしょくするのである。理解できない授業を受けオール1評価の生徒、いじめに耐え手のかからない生徒が学校にいる。子どもの教育権の保障ではなく、我慢し“学校に居続ける”義務を強制している実態。その結果いじめ自死。新舛さんが指摘する「学歴」レースに自尊感情を失うこどもがいる。高卒前提の資格社会、「学歴」で評価する社会があるのだ。学歴差別と貧困が横たわる現代、“学校カースト”と論評する人もいる。そういう視点からも、この相談会は教育の平等とこどもの人権を実現する糸口の一つであると考える。

コラム風　伊豆大島を襲った大雨による土石流は天災？　人災と考えてしまうのは、決して僕だけではないと思う。そしてヨーロッパは風速50メートルの暴風雨、人が飛ばされた。顕著な人災は、言うまでもない放射能被害。今回も台風豪雨で福島原発の汚染水漏れ、高い放射線濃度が検出。某首相のオリンピック招致で安全宣言そしてトルコ原発輸出推進は、事実に目をつぶり非科学的な“爆風”が席巻しているとしか言えない。人間が手にしてきた教育と科学は、無知と偏見から人間を解放した。そういう人類史に逆らい墓場へといざなう“爆風”をおこしている。だからこそ、穏やかで爽やかな風を、人間的で自然を受け入れる風を吹かせたいと願っている。

研究所事業へ多くの方々よりお便りや寄付を頂いた。中井恭子さま、村上ハルさま、ありがとうございました。一部アンガージュマンへ寄付いたしました。「引きこもりの苦痛の対価は、時給2千円か3千円。引きこもってもいい、肯定感が必要。引きこもりの人には、パワーがある・・・等々　あまり耳にしない前向きな表現。こうした流れを引き出すのは、滝田さんならではでしょう。（横須賀商工会議所　菊池さま）」「感想文読ませて頂きました、言葉って使い方で素敵になるんだなあって、心から感謝の気持ちになりました。これからも彼らしく生きてきたことをピアノを通して表現していけたらと考えて、一緒に勉強です。これからもよろしくお願い致します。（高比良和枝さん　ピアノ演奏秀一さん母）」　感謝の風！

寄稿　これからも応援団活動に参加していきます　川辺順子さん

10月24日(木)10月応援団会議　子と親と世代互いの交流と理解　右より山本・新舛・土屋・涌井夫妻・島根・川辺さん、滝田

9月8日のイベントから早いもので2ヶ月がたとうとしています。私自身ひきこもりの息子を持つ母親として、今回の集いに参加させていただいて本当に良かったと思います。テーマは重いものでしたが、トークと音楽のとても和やかな会でした。正直母親として今の家族の状況に悩み苦慮する事も多々ある中、ピアノ、おこと、フルートの心地良い音楽にとても癒されました。そして、かつて当事者でおられた岡本さんの率直な思いのお話は、私自身色々な気づきとたくさんの元気をいただきました。もしかしたら私の息子も同じように考えていることもあるのかなあという思いにも至りました。岡本さんのお話の中で私の心に残ったことは、ひとつはひきこもっていることは、本当に大変なんだということ。それは体験をされた岡本さんの生の声だからこそそのことの重みがより一層伝わりました。みんなができていることができない、できていないという思いは、私が考えている以上に深く自信を失い自己肯定感を失うことになるのだと思いました。まずは、ひきこもっているということを肯定することも含めて本人のありのままを受け入れることが、とても大事なんだと思いました。それは、岡本さんのおっしゃっている本人の自己決定まで待つということだと思いました。そしてもうひとつは人とのつながりの大切さのお話です。岡本さんは病院の先生や出会った本の中の人の生き様が、当事者であることをやめようという思いに至る、ひとつのきっかけになったことをお話されていました。そこから更に岡本さんは、人によって生かされているという謙虚な思いも話されていましたが、とても心を打たれました。人とのつながりの大切さそして有り難さは、私も自分の体験からとても感じています。滝田さんはじめアンガージュマンの存在、そして同じ悩みを持つ親の会の友人など多くの方々にとても救われました。1人じゃないという思いはくじけそうになった時大きな支えになりました。息子はまだ人とのつながりを受け入れていませんが、今回岡本さんのお話をうかがって、親の価値観や子どもをとりまく環境が生き辛さを作ってしまったかもしれませんが、それにとらわれ過ぎることなく、まずは子どものありのままの思いを受け入れて、子どもの生きなおしにゆっくりと寄り添うことで、親子関係の修復になり、いつか人とつながり外に出られるようになればいいなと思いました。私はまだまだ過中ですが、これからも人との繋がりを大切に、少しでも同じ悩みを持つ方々と支え合っていけたらと思います。そしてこども若者応援団の1人として自分の子どもも含めて理解を深め、応援する活動に参加していきたいと思います。　川辺順子さん

特別寄稿　福岡克彦さんを理解すること、一緒に歩むことの意味

福岡さんには元横浜市大加藤彰彦教授(現沖縄大学学長)の社会臨床学会、県青少年センターフリフリフリマで僕はお会いしている。福岡さんの事件はこども若者の現実に、確実に重なっていると僕は実感している。その後、ご両親からのお手紙で「上告棄却、受刑者決定」のお手紙を受けた(10月27日)、無念だ。　（注釈：滝田衛）

『皆様、初めまして、拘留されている福岡克彦です。今私は、東京拘置所C棟10階の単独室にて生活しています。ここでの生活もすでに半年を超えるものとなりました。2012年9月14日(金)に、全く身に覚えのない罪(脅迫罪)で、家宅捜査を受け「任意同行」の告知もなく。捜査員らに取り囲まれ、署へ強制連行され、6時間半に渡り不当な監視下に置かれた上で、逮捕となりました。全く身に覚えのない罪の為、否認する他なく、起訴→地裁で有罪判決→高裁でも有罪→最高裁へ進み、今現在、最高裁による判決を待つ身であります。

10月末日で、逮捕拘留413日を越えます。社会(世間)から隔離される「拘留」と言う名の、国からの「強制的ひきこもり」を強いられる日々を過ごしています。「社会的ひきこもり」や「精神的ひきこもり」という言葉があります。私自身、小学校をいじめによる登校拒否、中学校を偏差値教育に疑問を抱き不登校、高校は1年で中退し、大検を取得、通信制大学に籍を置きながら、沖縄への独り旅、四国遍路等を経験し、演劇の道へ。演劇の現場では、主に制作(プロデューサー。一般企業でいうと、経理・企画・宣伝広報・営業をまとめた様な役割)として活動し、首都圏の演劇活動では出来ないことに挑戦したいという意志の下、アマチュア演劇が国内において盛んな長野県松本市に転居し、本事件に巻き込まれてしまいました。松本の演劇人が今まで出来無かった事を短期間において次々と達成し、新聞報道やTVインタビュー等を受ける中で、妬み等が生まれてしまったのかなァ？等と察しております。

そして、今私が置かれている「強制的ひきこもり」生活の中で私の心の“支え”は、友や支援して頂いている方々からの便りです。人は、言葉に心傷つき、言葉に心癒されるものだと、今回の経験の中でよくよく知ることが出来ました。
逮捕されたことで、一方的に縁を切ってきた方々もいます。心の無い罵言を便りとして受け取ることもあります。時として善意の言葉が私の心を傷つけることもあります。それでもお便りを頂けることで「社会との繋がり」を改めて感じるのです。私からは平日のみ1日1通しか発信できませぬので、返信は中々難しいものと思いますが、宜しければお便りいただける方は、頂けると嬉しく思います。』　宛先　〒124-0001　東京都葛飾区小菅1－35－1－A　福岡克彦(さん)

相談は右の日程でご連絡ください。時間は10時～16時でお願いします。訪問は日程調整します、往復の時間も必要です、ご相談ください(土曜日も訪問は受け付けたいと思います)。応援団会議は横須賀市市民活動センター午後2時～4時です。ご参加を

11月の開所日程			
7日(木)	相談(予約ずみ)	21日(木)	相談
11日(月)	相談(予約済み)	25日(月)	相談
14日(木)	相談	28日(木)	午前　相談
18日(月)	相談		午後　応援団会議

中井さんに寄付もらいました　切手2000円、封筒400封、印刷紙等